

「お母ちゃん、誰。エ、源やんか。嬉しやの。あてなア。昨夜遅うにお風呂へ行たら少しお湯がぬるので、とう／＼風邪を引いて、今日頭が痛い依つて休んでたん、店で線香場を手傳ふて居たら、神棚のお燈明に大きな丁字が乗つたんで、あて待人にしてたんやわ。そんならやつぱり彼の人が来たわ。」

「オイ源やん。……來てる……來てる……。」

「解つてる。」

「昨夜遅がけに風呂へ行たら湯がぬるかつたんやと。風邪を引いて頭が痛ふて休んでたんやと。線香場を手傳ふて居たら神棚のお燈明に大きな丁字が乗つたんやと、やつぱり三つ乗つたやろか。」

「シヨム無い事を云はんと押入へ這入つて。」

「お母ちゃん、まだ色々話がおまんねけども先に彼の人の顔を見て來ますわ。」

二階へトン／＼、と上つて來て部屋の襖を開けて、普通なら今晚は大きにと云ひますが、もう年が明いたら夫婦にならうと云ふ仲やので、彼方に向けて煙草を喫んで居る後から背中を膝でポン。

「あ痛た。誰やい。」

「おいでやす。源さん如何して、やつたんや。何處ぞ悪かつたんと違ふか。案じて居たんやし。」

「フーム。今まで其手はたんと變ばれてました。」

「源さん。何を云ふて、やんや。解れへんがな。黙つて恐い顔をしてどないしてやつたんや。また喧嘩か。措いとうや。今までと違ふし。今は妾いと云ふ厄介者があるねし。若しも異變い事があつたら共に心配するやないか。怪つたいな顔をしてからに。」

「へエ。怪つたいな顔は生れ附きだす。」

「ア、そんな事を怒つて、やのか。妾い斯様して働いて居るのは何が楽しみや。たまにあんたが來て優しい事の二ツも云ふて貰ふのが楽しみやし。お前もかうして働いて居るのえらいやろけども、もう暫くやさかいに辛棒をしいやと、云ふて呉れてやつたら、夫れを楽しみに働くやないか。それに出たら怖い顔をして、なんやいな。自分ばかり煙草喫んで、あたいにも一服よんどう。」

(煙管を取つて煙草を喫む)

「さらひ。辻占が悪いと煙管まで詰つたある。」(コン／＼)

「コラ。煙管の知つた事やないわい。無茶をすない。雁首をへちやげて仕舞ひよつた。煙管が詰つたあるなら詰つたあると云へ、こゝに通す物が有るわい。これで通せ。」

「オ、いや、の、貴方反古を持つて歩いてなアのか嬉しやの。何時も半紙一折四つに折つて、懐中へ入れてなア。飛汁でも上つたらその紙を出して拭いてなアると、甚い男らしいけども、世帯してあんな派手な事をして呉れてやつたらどむならんと思ふてたが、そんな氣になつて呉れてやつた